

書 評

イギリス地方史協会の紹介(V)

Chetham Society

米 川 伸 一

筆者の個人的事情から一年以上間を置いてしまったが、今後は一年に二度位の割合で出来るだけ定期的に紹介を続けたい。

さて今回の対象は今まではやや趣を異にするチェタム協会 Chetham Society の刊行物である。十七世紀マンチェスターを中心とした手広い経済活動で産を成したハンフリー・チェタム Humphrey Chetham で有名なチェタム家の名を戴いた当協会は一八四三年に誕生したが、協会が生まれる経緯については、ニュー・シリーズの第百巻(一九三九年)に当時協会の會長の席を占めていたマンチェスター大学 J・テイト教授による「チェタム協会——一回顧」が掲載されているので興味ある読者は参照されたい。要するに当時先輩格のサーティーズ(一八三四年)、キャムデン(一八三八年)両協会を範として創設された当協会は、ランカシャー及びチェシャの史料の刊行を目的として(もっとも現実には前者が刊行物の八割以上を占めている<sup>①</sup>)、以後旧新両シリーズを合計して既に二百三十数冊の史料・研究成果を公にして来たのである。次に当協会の刊行史料の特

徴として他の考古学協会のそれと著しく相違する点は、刊行される史料が多くは近世に属していることでこれは他の地方史協会には見られないものである。

そこで当協会の成果の創立当初から現在に至るまでを一瞥すると、史料纂編者の質的向上が明瞭に窺われるのであるが、特にこの一劃期となったものは、一九二〇年代における都市研究で広く名を知られた前記のジェームズ・テイト James Tait の會長就任であり、それ以来当協会とマンチェスター大学との密接な関係が保たれるようになったのである。そしてそれ以降 G・H タップリングの「ロッセンデイル経済史」The Economic History of Rossendale, New ser. vol. 86 とか H・J・ヘーヴィットの「中世チェンヤ」Medieval Cheshire, New ser. vol. 88. 或は F・ウォーカー「産業革命以前における西南ランカシャーの「歴史地理」Historical Geography of Southwest Lancashire before the Industrial Revolution, New ser. vol. 103 等の優秀な研究成果が史料の刊行と平行して公にされたのであった。この点でも当協会はイギリスの多数の地方史協会の中で独自の地位を占めて来たと言えるであろう。

尚、今回は対象となる史料が膨大な数に達するため遺憾ながら内容に立ち入って論及することはまず不可能となった。それに今までの経験からみて筆者の浅学のため、触れるべくして見落した論点があるかとも思われる。この点をあらかじめお断りして置きたい。

政治史関係。当部門の史料として特に注目し得るものは市民革命に関するものである。即ち G. Ormerod (ed.), Tracts relating to Military Proceedings in Lancashire during the Great Civil War, vol. 2 (以下 New ser. と記入のなき場合は旧シリーズのこと) 及び下院の諸願書から兵役・火薬庫占拠等革命に関する史料が内戦の進行順に印刷されてあり、フアリントン家の史料を集めた S. M. Farrington (ed.), The Farrington Papers, vol. 39 とカイト・ロー・ロウナン (1681年死亡) の筆記なると推定される A Discourse of the War in Lancashire, vol. 62 と共に「市民革命の史料として見逃すことの出来なからぬ」であり A. Broxap 「ランカシャーをける市民革命」The Great Civil War in Lancashire 及び大に利用されたものであるが、更に彼自身の編集になるものとしてマンチェスター防衛を目的とした募金の記録 A Manchester Assessment of 1648, New ser. vol. 63 (「雑記録」第二巻) がある。以上はランカシャーに関するものであるが、チェンバードン J. A. Atkinson (ed.), Tracts relating to the Civil War in Cheshire 1641~1659, New ser. vol. 65 を見いだすだけである。

次に議会関係としてはこの分野の権威であるノティンガム大学 J. S. Roskell の The Knights of the Shire for the County Palatine of Lancaster (1377~1460), New ser. 96 が代表の議員について個々に詳細なコメントを加えておるほか、同称なものとして H. Hornoyold-Strickland, Biographical

Sketches of the Members of Parliament of Lancashire (1290~1550) New ser. vol. 93 を採られる。その他一五年に起つたトーリーの指導者ウィンダム捕縛事件の直前にあけるランカシャーの政治・宗教状況を記述した S. H. Ware, The State of Parties in Lancashire before the Revellion of 1715, vol. 5. ウォリアム二世時代のスチャアート王家派暗謀事件の中でも最も重要な一六九六年マンチェスターに起つた事件を対象とした W. Beaumont (ed.), The Jacobites Trials at Manchester in 1694, vol. 28 等が興味ある史料を提供してくれらる。絶対王制期ランカシャーにおける兵役制度を国務文書・枢密院令等を利用して説明したものとして J. Harland (ed.), The Lancashire Lientenancy under the Tudor and Stuarts, 2 vols. vol. 49~50 がある。

経済史関係。中世盛期に属するものとしてはまず全二巻六部の歴大な史料 J. C. Atkinson (ed.), The Coucher Book of Furness Abbey, New ser. vol. 9, 11, 14, 74, 76, 78. に触れるべきであらう。フアネス修道院はランカシャー北部に位置し、ノリ八世時代の世俗財産評価は 763-6-10 という中規模聖界所領を保持したが、これに関する土地調書を始めた公私家あらゆる文書を印刷に付したのが本書であり、特に「解散」当時の詳細な土地台帳は有益であらう。次に封建盛期における最大の直屬受封者といわれたリンカン伯 Henry de Lacy が二州に所有していた諸マナについて一二九五~六、一三〇四~五年の会

計簿を通じて分析を果した P. A. Lyons (ed.), Two "Comptoti" of the Lancashire and Cheshire Manors of Henry de Lacy, Earl of Lincoln, vol. 112 の種の業績としては出色のものである。「特許状集成」Charituary として全三巻七部に及ぶこれ亦大部な史料 W. Farrer (ed.), The Charituary of Cockersand Abbey of the Premonstratensian Order, New ser. vol. 38~40, 43, 56~57, 64 以下三巻の J. Varley (ed.), A Middlewinch Charituary, New ser. vol. 105, 108 がある。前者は公文書館の史料から荘官の会計簿に至るまで各方面の記録を含み「解散」に至るまでの修道院経済の動向を知るためには第一級の史料集であり、後者は十七世紀に編纂された聖界所領の史料を含むほか細目に亘る紹介が付けられる。「証書」deeds 類を収録したもので J. Parker (ed.), Lancashire Deeds, vol. 1 New ser. vol. 91 以下 G. A. Stocks and J. Tait (ed.), Dunkenhagh Deeds 1200~1600, New ser. vol. 80 (「雑記録」第四巻) がある。チャートリヤの紹介として J. ハントの紹介とハーランドの The Chartulary or Register of the Abbey of St. Werburgh, Chertter, New ser. vol. 79 が唯一のものである。

くわして十四~十五世紀の史料として J. Harland (ed.), Three Lancashire Documents of the Fourteenth and Fifteenth Centuries, vol. 74 が利用価値の高さのゆえである。これは一三二一年における De Lacy 家の訊問調査記録のほか、十四世紀前期における当州の騎士土地保有を調査した史料、或

は一四二二一年のトーマス・マンダーリン Ashton-under-Lynn のマナ慣習と土地台帳等が収録されている。更に後にハントリヤとなった Legh 家のウァリントン Warrington の土地台帳として W. Beaumont (ed.), Warrington in 1465, vol. 17 がある。

次に、絶対王制及び市民革命前後の時期にうつては実に豊富な史料が印刷に付られた。まず土地台帳・マナ調査書を中心としたものには「雑記録」第三巻中の Rentals de Cokersand vol. 57, 同五巻中の The Easter Rolls of Whalley in the years 1552 and 1553, vol. 96, 或は同六巻中の The Rent Roll of Sir John Towneley, vol. 103 等がある。とりわけマナ調査書の完全複製版であるリチャード・シリウス「雑記録」第三巻の C. W. Sutton (ed.), A Survey of the Manor of Pentwortham, New ser. vol. 73 には「文録」sub-letting の検証が可能なよう更に W. H. Chippindall (ed.), A Sixteenth-Century Survey and Year's Account of the Estates of Horby Castle, vol. New ser. vol. 102 以下十六世紀のマナ調査書として最も詳細を極めたものの一五八一~二二年の土地台帳と共にごの種の史料としてまず完璧である。

同時代のマナ或はコート・リート記録としてはまず十六世紀のマンチスターを対象とした J. Harland (ed.), A Volume of Court Leet Records of the Manor of Manchester, vol. 63. The Same (ed.), Continuation of the Court Leet Records of the Manor of Manchester, vol. 65 がある。W. Hudson

(ed.), *Leet Jurisdiction of Norwich* の比較し得る貴重な史料を言えよう。次に市民革命期を含む記録としてはリドー・シリーズ「雑記録」第四巻中の H. W. Clemesha, *The New Court Book of the Manor of Bramhall*, New ser. vol. 80 及び J. G. de T. Mandley (ed.), *The Portmote or Court Leet Records of the Borough or Town and Royal Manor of Salford*, 2 vols. vol. 46, 48 があり、両者共当法廷史料の完全複製版としてこれ以上を望むべくもないほど十分な編集であり、市民革命期における領主裁判所の変貌を分析することが出来る。更に領主間の共同地を廻る紛争については、ウエスト・ライディングの州境に位置する広大な Cokeye More を対象とした「雑記録」第二巻中の Examinations towchlynge Cokeye More, vol. 37 を見逃してはならぬ。

次の家計簿に類する記録としては対照的な二つの史料が際立っている。一つは十六世紀後期におけるダービー伯の家計簿で F. R. Raines (ed.), *The Darby Household Books*, vol. 31 がそれであり、他の一つは市民革命におおつて議會側に立ったミントリ Shuttleworth 家の一五八二〜一六二二年間の収支簿 J. Harland (ed.), *The House and Farm Accounts of the Shuttleworths of Gawthorpe Hall*, 4 vols. vol. 35, 41, 43, 46 で後者の大部分な史料からは、牧畜を主体とした当州の農業構造の特質を抽出することが出来る。

最後に市民革命以降の史料としては、続いてサルフォードの法廷記録が J・テイトによりニュー・シリーズ「雑記録」第六巻

中の *The Court Leet or Portmote Records of Salford*, 1735〜38, New ser. vol. 94 及び発行されたのが、特筆に価するものがあるのは A. Sparke (ed.), *The Township Book of Halliwell*, New ser. vol. 69 である。これは一六四〇〜一七六二年に及ぶハリウエルの村役人 constables の「町会帳簿」 township book の完全複製であり、地方自治の研究家ばかりか経済史家にとっても見逃すことの出来ないものであろう。更に、ニュー・シリーズ「雑記録」第二巻中の H. T. Crofton (ed.), *Broughton Topography and Manor Court*, New ser. vol. 63 にも、十七〜八世紀の土地台帳をも含めて貴重な多くの文書が掲載されている。尚、「遺産目録」については宗教関係を見られた。

都市・村落史関係。ランカシヤの都市としてまず念頭に浮かぶのはマンチェスターとランカスター、それにリバプール等である。マンチェスターについては J. Harland の編纂による *Manecestre: being chapters from the early recorded history of the barony; the lordship or manor; the vill borough, or town of Manchester*, 3 vols. vol. 53, 56, 58 及び *Collectanea relating to Manchester and its Neighbourhood*, 2 vols. vol. 68, 72 がある。その中でも前者にはサクソン時代からドゥムズデイ・ブックを経て十六世紀に至る当市の租税簿・土地台帳等あらゆる重要な記録が全三巻に収録されており、当市に関する基礎史料として不動の地位を占めている。

ランカスターについてこれに相当するものは W. O. Roper (ed.), *Materials for the History of Lancaster*, 2 vols. New ser. 61~62 でありしが、本史料集では「恩寵の巡礼」を始めとして内容別に記録が分類整理されている。最後にリンブーンにはかような史料集を見出すことは出来ないのであるが、十七世紀ランカシャのシェントリであったノリス家の文書を収録した T. Heywood (ed.), *The Norris Papers*, vol. 9 には所載漸く勃興したリンブーンに關係した多くの史料が含まれてゐることを付言して置かう。

さて当協会の刊行物における一特徴は、多数の個々の「村史」が公にされてゐることである。これは厳密に区別すればリンブーン単位にしたものと教区を単位にしたものと二分することが出来る。後者は言うまでもなく宗教關係の史料が多く必ずしも利用価値が高いとも言えないが、その中の一章は普通「村史」に當つらわつており、更に付録等には興味ある史料を発見するのことが出来る。H. Fishwick, *The History of the Parish of Poulton-le-Fyde*, New ser. vol. 8 等はその一例である。リンブーン作品はわれわれの利用価値から見れば特に玉石混淆である。其に属するものとして、例を採り、H. T. Crofton, *A History of the Ancient Chapel of Shroftford in Manchester Parish*, 3 vols. New ser. vol. 42, 45, 51 中の第二巻には豊富なリンブーン關係史料が収録されており、第三巻は現代の産業にまで論及されてゐる。同一著者に於て *A History of Newton Chapelry in the Ancient Parish of Manchester*, 3 vols (4 parts)

New ser. vol. 52~55 の第二巻にも十六世紀のリンブーン法廷史料、土地台帳、巡回裁判記録、救貧法史料等貴重な史料が含まれて居る。H. Fishwick, *The History of the Parish Lytham*, New ser. vol. 60 には並教区に關する多種類の租税記録が抽出して居る。

その他の種の作品を題目だけ列記すれば、H. Fishwick, *The History of the Parish of Kirkham*, vol. 92: do., *The History of the Parish of Garstang*, 2 vols. vol. 104~105: G. H. O. Bridgeman, *The History of the Church & Manor of Wigan*, 4 vols. New ser. vol. 15~18: H. Fishwick, *The History of the Parish of St. Michaels-on-Wyre*, New ser. vol. 25: W. H. Chippendale, *The History of the Township of Arkholme*, New ser. vol. 90 (Miscellanies vol. 5): G. Weld, *A History of Leagram*, New ser. vol. 72: R. Trappes-Lomax, *A History of the Township and Manor of Clayton-le-Moors*, New ser. vol. 85: W. H. Chippindall, *A History of the Township of Ireby*, New ser. vol. 95: do., *A History of Whitting*, New ser. vol. 99: do., *A History of the Parish of Tunstall*, New ser. vol. 104 等。

司法・財政關係。ここで言う司法とは主として国王裁判所の記録であるが、(領主裁判所記録は經濟關係で既述)ランカンヤに關する諸種の国王裁判所記録がほゞ抽出されており、これは

他州では見られない成果であらう。まず、一二七〇年代に行なわれた「権限開示状令」Quo Warrantis の分析したものととして H. A. Cautle, *The Pleas of Quo Warrantis for the County of Lancaster*, New ser. vol. 98 があり、ランカスター特権伯所領の司法組織を理解するために好箇の成果である。更に十二世紀の史料としてはチェスターにおける諸種の裁判記録の「摘要」が R. Stewart-Brown (ed.), *Calendar of County Court, City Court and Eyre Rolls of Chester 1259~1297*, New ser. vol. 84 として出版されているが、周知のようにこれら諸法廷の印刷史料は比較的稀なのであり、編者による長文の紹介と共に当地域の研究に従事する以外の者にも参考にならう。次に、ランカスター特権伯の所有する特権裁判所 Palatine Court の十五世紀に属する記録が J. Parker (ed.), *Pleas Rolls of the County Palatine of Lancaster, Roll I*, New ser. vol. 87 として公に刊行されており、当地方の研究には必須のものである。更に近世の裁判所記録として逸することの出来なう四季裁判 Quarter Session のそれは、ライイトの編纂と要を得た紹介と共に 1590~1606 年の史料が刊行された。Lancashire Quarter Sessions Records vol. 1, New ser. vol. 77 がそれである。

宗教関係。この部門でまずあげなければならぬのはチェスター司教裁判所或はヨーク大司教裁判所に保存されている「遺言」と「遺産目録」の完全複製版の刊行であり、G. J. Picope,

(ed.), *Lancashire and Cheshire Wills and Inventories*, 3 vols, vol. 33, 51, 54; J. P. Darwaker (ed.), *Ditto*, New ser. vol. 3; do., *Lancashire and Cheshire Wills and Inventories*, 1572~1696, New ser. vol. 28 などが相次いで出版された。当史料の「目録」は各州で出版されているが、全文がかくも多数公にされている州は必ずしも多くはないのである。これらの中にはランカシャーの織元のそれも入っており、経営(農業も含めて)分析の史料として利用度の高いものである。宗裁判所の訴訟事項を知るためにこれ亦見逃すことの出来ないのでウエリ―修道院を対象とした *Act Book of the Ecclesiastical Court of Whalley*, 1510~1538, New ser. vol. 44 及び *Minutes of the University of A. M. Cooke* の編纂に注意する。

次に「カトリック系非国教徒」recusants に関する記録として T. E. Bibson (ed.), *Crosby Records: a chapter of Lancashire recusancy*, New ser. vol. 12 及び L. J. Stanley, *The Lancashire Elizabethan Recusants*, New ser. vol. 110 があるが、ランカシャーが長老派の拠点であったため、これに関する史料・研究も多く発見される。例えばマンチェスターの長老派の記録 W. A. Shaw (ed.), *Minutes of the Manchester Presbyterian Classis*, 3 vols, New ser. vol. 20, 22, 24, 同 *Minutes of the Manchester Presbyterian Classis*, 1647~57, New ser. vol. 41 などであるが、十七世紀の著名な長老派牧師についての二書、即ち R. Parkinson (ed.), *The Life of Adam Martindale*, vol. 4 及び

do, The Autobiography of Henry Newcome, 2 vols. vol. 26~27 及びそのほか。最後に十八世紀の新教徒の著者であるヘンリー・ニューカム卿の M. Herbert, War-  
rington Academy; its History and Influence, New ser. vol. 107 がある。

その他。逸作の出来なりのランカシャーとチェンバール作製地を扱った H. Whitaker, A Descriptive List of the printed Maps of Lancashire, 155~1900, New ser. 101 がある。A Descriptive List of the printed Maps of Cheshire, 1577~1900, New ser. vol. 106 の二書。また十六世紀のハンブルクの日記 F. R. Rainer (ed.), The Journal of Nicholas Assheton, vol. 14 及び E. Hawkins, Travels in Holland, The United Provinces, England, Scotland and Ireland, vol. 1: R. Parkinson (ed.), The Private Journal

and Literary Remains of John Byron, 4 vols. vol. 32, 34, 40, 44: J. Crossley (ed.), The Diary and Correspondence of John Warshington, 2 vols. vol. 13, 36 等々。

註(1) 前記「一回顧」中の J・ナイトの計算によれば Old Series のうちで「雑録」を除きチェンバールに関するものは一〇九冊中僅か一九冊、New Series 九三冊中九冊にすぎない。

(2) 「史料を利用して得る状態に置く」という課題は未だ完成してはいない。しかし今や地方史家の前にある仕事は(史料の)集成というよりその解釈なのであって、解釈という点では先駆者たちは避け難いことなのだが貧弱であつた。「前記「一回顧」中である。

(一橋大学大学院学生)